



脂質生化学研究 Circular

2021

日本脂質生化学会
(JCBL)

日本脂質生化学研究 サーキュラー 2021

目 次

第 63 回日本脂質生化学会のお知らせ	1	
令和 3 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ	5	
第 63 回日本脂質生化学会 発表演題の募集	6	
第 63 回日本脂質生化学会を開催するにあたって	上田 夏生	8
オリパラ 2020 と COVID-19 に翻弄された第 62 回日本脂質生化学会顛末記	花田 賢太郎	10
[参考資料] COVID-19 発生を受けた第 62 回日本脂質生化学会の行動計画	14	
脂質生化学会と植物脂質科学研究会の合同シンポジウムについて		
太田 啓之	17	
山本尚三先生の思い出をたどり偲ぶ	吉本 谷博	19
赤松 譲先生を偲んで	西島 正弘	24
リピドミクスを通じた脂質研究への感謝と恩返し	池田 和貴	26
会の活動状況		28
賛助会員	33	
会則	34	
学会事務の取り扱い内容と連絡先	36	

第 63 回 日本脂質生化学会のお知らせ

期日： 2021 年（令和 3 年） 6 月 9 日（水）、 6 月 10 日（木）

会場：サンポートホール高松

〒760-0019 香川県高松市サンポート 2-1 高松シンボルタワー ホール棟

TEL : 087-825-5000

<https://www.sunport-hall.jp/>

JR 高松駅から徒歩約 3 分

※会場へのアクセスについては、「会場のご案内」をご覧ください。

実行委員長：上田夏生（香川大学医学部 生体分子医学講座 生化学）

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸 1750-1

TEL : 087-891-2104

FAX : 087-891-2105

e-mail: jtbl2021@med.kagawa-u.ac.jp

大会ホームページ：<http://jtbl.jp/wiki/JCBL:63>

発表形式：

・一般演題発表 A 発表 10 分 + 討論 5 分 = 15 分

・一般演題発表 B 発表 7 分 + 討論 3 分 = 10 分（ショートトーク）

※一般演題発表 B は、ショートトーク枠での発表となりますので、必ずしも希望する演題領域を反映した枠になるとは限りません。

※発表はすべて液晶プロジェクターを用います

特別講演

花田 賢太郎 先生（国立感染症研究所細胞化学部）

シンポジウム

1. 新しい脂質メディエーター研究の潮流

2. 脂質生化学とビタミン学の接点

ランチョンセミナー

1. 株式会社エービー・サイエックス

2. 株式会社島津製作所

演題登録期間：2021年1月25日(月)～2月19日(金)

演題要旨送付締切：2021年2月26日(金)

事前参加登録期間：2021年1月25日(月)～4月9日(金)

(5月中旬に参加証を送付予定)

名誉会員、贊助会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

学会参加登録費：事前参加登録：一般 6,000円 学生 3,000円

当日参加登録：一般 7,000円 学生 4,000円

(非会員の方は、要旨集代金を別途申し受けます。)

事前参加登録の事前申し込みは、郵便振替用紙をご利用ください。できるだけ事前にお振り込みください。なお、お支払いいただいた参加登録費の払い戻しはいたしかねますので、ご了承下さい。

振込先：ゆうちょ銀行

口座記号番号、口座名、口座番号は大会ホームページ(<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:63>)をご覧ください。

懇親会：日時：6月9日（水）18時頃より

会場：サンポートホール高松 第2小ホール（第2会場）

〒760-0019 香川県高松市サンポート2-1

高松シンボルタワー ホール棟5F

TEL：087-825-5000

懇親会参加費：一般 8,000円 学生 4,000円

(当日、受付にてお支払いください。)

会場周辺の地図と交通アクセスについては「会場のご案内」のページをご覧ください。

交通・宿泊についての学会からの手配はございません。

※ 新型コロナウイルスの感染状況によってはプログラムの一部変更またはオンライン開催の可能性があります。最新の情報は大会ホームページに掲載いたします。

第 63 回 日本脂質生化学会 特別講演、シンポジウム、ランチョンセミナーのお知らせ

特別講演

「COOL STRUTTIN' オルガネラ間脂質輸送」

講演者：花田 賢太郎

(国立感染症研究所細胞化学部)

座長：上田 夏生（香川大学医学部）

シンポジウム 1

「新しい脂質メディエーター研究の潮流」

オーガナイザー：山本 圭（徳島大学）、宇山 徹（香川大学）

予定演者：稻住 知明（熊本大学）、古賀 友紹（熊本大学）、可野 邦行（東京大学）、
辻 大輔（徳島大学）、長竹 貴広（医薬基盤研）、山本 圭（徳島大学）、
宇山 徹（香川大学）

シンポジウム 2

「脂質生化学とビタミン学の接点」

オーガナイザー：今井 浩孝（北里大学）、市 育代（お茶の水女子大学）

予定演者：仲川 清隆（東北大学）、白井 康仁（神戸大学）、中川 公恵
(神戸学院大学)、山根 大典（東京都医学総合研究所）、榊 利之（富山県立大学）、
今井 浩孝（北里大学）、市 育代（お茶の水女子大学）

ランチョンセミナー

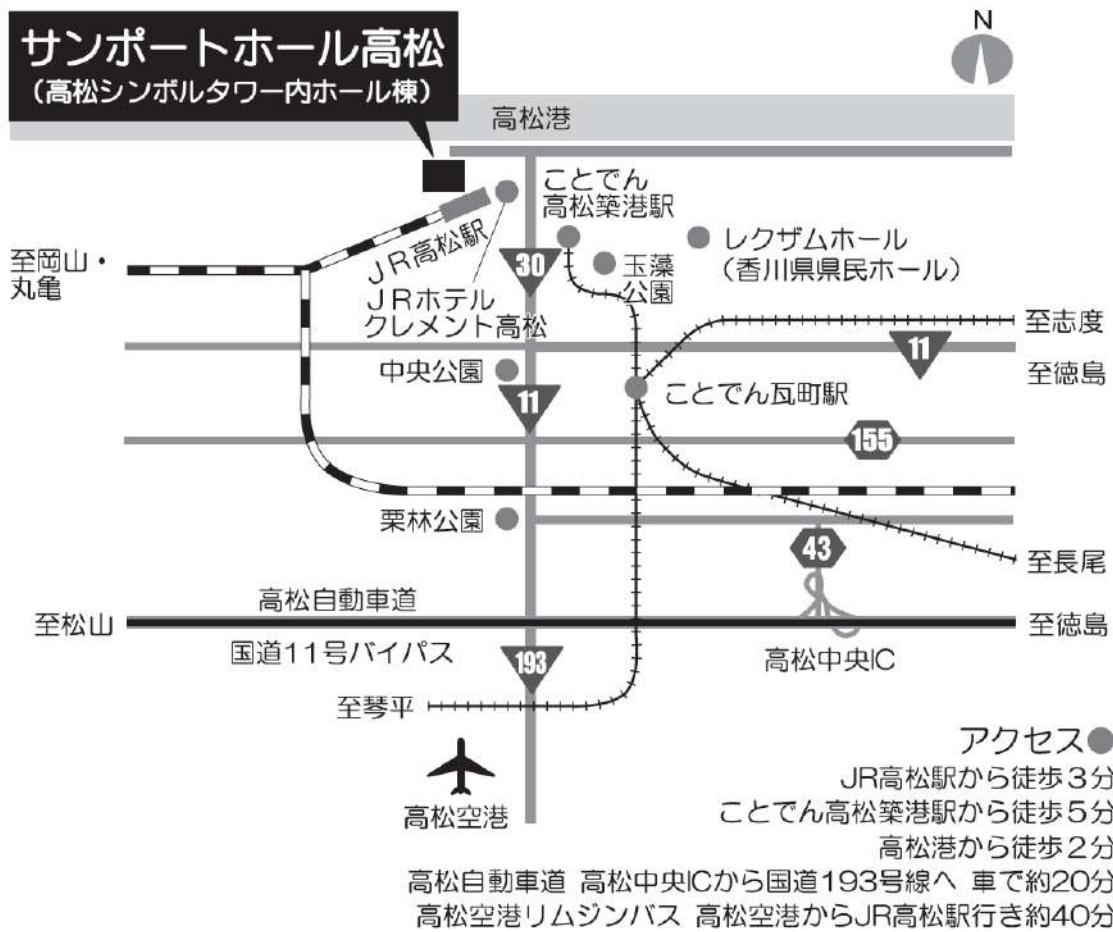
6月9日（水）株式会社エービー・サイエックス

6月10日（木）株式会社島津製作所

日程・演者等につきましては変更の可能性があります。最新の情報は大会ホームページに掲載いたします。

第63回 日本脂質生化学会 会場のご案内

大会会場：サンポートホール高松（JR高松駅から徒歩約3分）
 〒760-0019 香川県高松市サンポート2-1 高松シンボルタワー ホール棟
 TEL: 087-825-5000
<https://www.sunport-hall.jp/>



※サンポートホール高松は高松シンボルタワーのホール棟にあります。

令和 3 年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を令和 3 年 6 月 9 日（水）夕刻、一般演題終了後（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 梅田 眞郷

議題

1. 令和 2 年度事業報告
2. 令和 3 年度決算報告ならびに監査報告
3. 令和 3 年度事業計画ならびに予算案
4. その他

令和 3 年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の幹事会を令和 3 年 6 月 9 日（水）昼頃に開催いたします（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）。幹事・名譽会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 梅田 真郷

議題

1. 令和 3 年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
2. その他

第 63 回日本脂質生化学会 発表演題の募集

○ 演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学医療情報ネットワーク(Umin)の ELBIS システム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意下さい。また印刷用の講演要旨は、電子メールの添付ファイルで下記事務局 (jcbl.org@gmail.com) までお送りください。PDF ファイルと Word ファイルの両方を送付して頂きます。

一般講演の筆頭演者は本学会の会員に限ります。未入会の方は必ず令和 2 年 4 月末までに入会手続きを完了してください。

演題登録の開始は 2021 年 1 月 25 日 (月)、締め切りは 2021 年 2 月 19 日 (金) です。講演要旨送付の締め切りは 2021 年 2 月 26 日 (金) です。

○ 演題登録の仕方

- 1) 次ページの作成要領に従って講演要旨を作成して下さい。「要旨 (600 字以内)」は演題登録の際に必要ですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意下さい。
- 2) 日本脂質生化学会のホームページ (<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:63>) にアクセスし、「演題申込」を選択して下さい。
- 3) 与えられた指示に従って演題登録を行って下さい。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意下さい。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取って下さい。一般発表は 15 分発表（討論含む）と、若手や新規分野の発表を促すために 10 分発表（ショートトーク、討論含む）を設けます。
- 4) 登録終了後、抄録登録[受付番号]というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいて下さい。
- 5) インターネットが使用できない方、登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先までご連絡下さい。

○ 講演要旨送付先 (PDF ファイルと Word ファイルの両方をお送り下さい)

E-mail アドレス : jcbl.org@gmail.com

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学 大学院薬学系研究科 衛生化学
日本脂質生化学会 講演要旨受付 (担当: 河野 望)
Tel: 03-5841-4723 FAX: 03-3818-3173

○ 学会についてのお問い合わせ

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸 1750-1
Tel: 087-891-2104、Fax: 087-891-2105
E-mail: jcbl2021@med.kagawa-u.ac.jp
上田 夏生 (香川大学医学部 生体分子医学講座 生化学)

第 63 回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. テンプレートを使用する場合、日本脂質生化学会ホームページ (<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:63>) から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフト Word で作成して下さい。テンプレート上で入力すれば、字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成して下さい。
 - * A4 サイズ、縦 260 mm×横 170 mm の大きさで作製して下さい。原則として字の大きさは 12 ポイント、フォントは「MS 明朝」をご使用下さい。要旨集印刷の際、4/5 程度に縮小されて印刷されます。ページ番号は付けないで下さい。
 - * 演題名：全角 8 文字目から書き始め、2 行以内に納めて下さい。
 - * 氏名・所属：演題名より 1 行空けて下さい。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適當な略記を用いて（　）内に入れて下さい。発表者（または連絡著者）の電子メールアドレスを記載して下さい。
 - * 要旨：氏名・所属より 1 行空け、全角 1 文字空けて書き始めて下さい。全体を枠で囲んで下さい。
 - * 本文：要旨より 2 行空けて下さい。
3. 講演要旨の作成にあたって
 - * 1 ページから 6 ページの範囲で作成して下さい。
 - * 日本語か英語で作成して下さい。
 - * 講演要旨により、日本脂質生化学会会則第 2 条に定められた本会の目的に沿わないと判断される演題は、発表をお断りすることがあります。
 - * 講演要旨の作成にあたっては、著作権、知的財産権、及び二重投稿と解釈されることへの懸念等についてご留意下さい。
4. 講演要旨の送付にあたって
 - * 講演要旨の PDF ファイルおよび Word ファイルを、前ページの「講演要旨送付先」まで電子メールの添付書類としてお送り下さい。ファイル名は「抄録登録[受付番号]」としてください。
 - * 電子メールの「件名」の欄に、演題登録後に届いた「抄録登録[受付番号]」を明記してください。

講演要旨送付の締め切りは 2021 年 2 月 26 日(金)です。

なお、WEB からの演題登録（2 月 19 日（金）締め切り）を忘れずに行って下さい。

第 63 回 日本脂質生化学会を開催するにあたって

実行委員長 上田 夏生

このたび、第 63 回日本脂質生化学会の実行委員長を仰せつかりました香川大学医学部の上田です。「深化する脂質生物学」をスローガンに掲げ、6 月 9 日（水）と 10 日（木）の二日間にわたり、香川県高松市で開催致します。会場の「サンポートホール高松」は JR 高松駅前にそびえる地上 30 階の高松シンボルタワーの一画にあり、瀬戸内海を見晴らす、交通至便で風光明媚な絶好の地にあります。四国で開催されるのは、2008 年の第 50 回大会（徳島市、実行委員長：徳村彰先生）以来 13 年ぶりとなります。香川県では初めての開催であり、大変光栄に存じています。

本大会の特別講演は、第 62 回大会（2020 年）の実行委員長を務められた花田賢太郎先生（国立感染症研究所細胞化学部）にお願いしました。「COOL STRUTTIN’ オルガネラ間脂質輸送」というタイトルでご講演頂きます。

シンポジウムの 1 つ目は、「新しい脂質メディエーター研究の潮流」であり、山本圭先生（徳島大学）と宇山徹先生（香川大学）にオーガナイザーをお願いしました。私の恩師であり、本学会名誉会員の山本尚三先生（徳島大学名誉教授）は 2020 年 4 月 18 日に他界されましたが、我が国のプロスタグラジン研究の創始者のお一人であり、シクロオキシゲナーゼの精製に世界で初めて成功した山本先生を偲んで企画し、若手研究者に脂質メディエーター研究の最新の成果を発表して頂く機会にしたいと思います。

2 つ目のシンポジウムは、「脂質生化学とビタミン学の接点」というタイトルで、今井浩孝先生（北里大学）と市育代先生（お茶の水女子大学）にオーガナイザーをお願いしました。肥満や動脈硬化が世界共通の社会問題となるなか、脂質生化学研究が医学・栄養学に果たす役割は益々増大しています。私は必須脂肪酸の観点から長らくビタミン学にも係わってきたことから、脂質生化学とビタミン学の両分野でご活躍の研究者をお招きし、両分野の接点を再確認して脂質生化学研究の新たな拡がりを探りたいと思います。

高松の観光と言えば、昔から栗林公園、屋島、そして少し足を延ばして琴平の金刀比羅宮が定番ですが、お忙しい先生方には、高松港の防波堤の突端にある赤い灯台「せとしるべ」がお勧めです。学会会場から半時間余りで往復できるウォ

一キング・コースを辿れば、港に出入りする船を眺めながら初夏の潮風を堪能できるに違いありません。

多くの学会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

オリパラ 2020 と COVID-19 に翻弄された第 62 回日本脂質生化学会顛末記

第 62 回日本脂質生化学会実行委員長

花田賢太郎（国立感染症研究所・細胞化学部）

第 62 回日本脂質生化学会は、新型コロナウイルス SARS-CoV-2 の感染による COVID-19 の拡大のため、参考集型の学会を開催できず、要旨集を発行したことを持ってやむなく紙上開催ということとなりました。その顛末を少々長くなりますが時系列的にご紹介することにより、実行委員長報告に代えさせていただきます。本報告および学会 HP に掲示した行動計画書等が今後のパンデミック感染症発生時における当学会の対処法の一助となれば幸いです。

2018 年

5 月 31 日：第 60 回日本脂質生化学会（深見希代子実行委員長、八王子市開催）の幹事会にて、第 62 回学会実行委員長への推举を謹んでお受けした。8 月：オリパラ 2020 のため都心の主だった候補会場で 2020 年 5-6 月はすでに予約済みであることが判明。焦ったが、タワーホール船堀で 2020 年 5 月 14、15 日を仮予約できた。一方、梅田脂質生化学会長の内諾のもと、日本植物脂質科学研究会の当時の会長である佐藤直樹先生に打診して共催シンポジウム開催に対する前向きの回答を得た（その後、2019 年 4 月からは太田啓之新会長との間で具体的な話を進め、「COOL STRUTTIN’ 細胞内脂質輸送」と銘打った共催シンポジウムを大会前日に開催することとし、タワーホール船堀の予約も 2020 年 5 月 13-15 日に変更した）。

2019 年

7 月：「第 62 回日本脂質生化学会」名で銀行口座を開設。8 月：学会サーキュラー原稿・要旨集等の締切確認、企業広告の要項確認などを学会執行部、横溝研の奥野准教授、および春恒社の横山氏と連絡しながら行った。並行して、大会趣意書を作成し、協賛金の依頼文書を発送した（公務員倫理法の縛りで花田は製薬関連企業に寄付依頼できないので趣意書は梅田会長名での寄付依頼とさせてもらった）。7-8 月：特別講演者（梅田会長）および大会二日目午後に行う三つのミニシンポジウムのオーガナイザーが決定した。ランチョンセミナーについても

島津製作所とエービー・サイエックス社から開催の内諾をいただけた。10月：ポスター出来上がり（デザインは自分自身で行い、Photoshop 上のアレンジは当研究部の水池彩博士研究員が担当した）。11月：学会幹事会にて第 62 回大会の企画内容を報告した。12月：順天堂大・奥野先生が演題登録サイトを立上げ、京大・原先生が学会 HP とリンクしてくれた。

と、ここまででは早め早めに手を打って準備万端進んでいるように思っており、大会当日を楽しみにしていた。

2020 年

1月下旬：学会サーキュラー及び A4 サイズの大会ポスターを会員へ郵送。A2 サイズの大会ポスターを学会幹事や協賛企業等宛てに郵送。2月初旬：演題登録、演題要旨送付締め切り。一般講演登録が例年よりも少なめであった。前回の第 61 回大会（木原章雄実行委員長、札幌市開催）が 7 月開催であり、まだ半年しかたっていないので致し方なし。

1月初旬：中国で新型肺炎アウトブレイクが起きていることが国際的に報道される。2月 13 日に国内で初の COVID-19 による死者が発生、21 日に国内累計感染者数が 100 人を超える。27 日に安倍総理（当時）が全国小中高校の 3 月からの臨時休校を要請。3月：13 日に改正新型インフルエンザ等対策特別措置法（新型コロナウイルス特措法）成立。1月上旬の頃はまだ中国事案と思っていたのがその後の 2 か月ほどで日本を含む全世界パンデミックとなった。

2月下旬：大会実行委員長として、COVID-19 対応のための行動計画案（開催中止の判断基準を含む）を作成し、梅田会長、横溝庶務幹事、奥野先生、プレシンポジウムを共催する日本植物脂質科学研究会の太田会長に打診。参考開催できずとも、要旨集は発行して 62 回大会は紙上開催により成立と提案。3月 6 日：プログラム委員会にて学会プログラムを決定。その後、要旨集印刷会社へ入稿。3月 17 日：学会執行部承認の行動計画を学会 HP に掲載し、全会員にメールでもお知らせした。3月 19 日：参考開催をする場合の行動計画案も念のため策定した（参考開催への一縷の望みをこの日までは持っていた）。

3月 20 日：行動計画における参考中止判断基準を満たした（正会員が所属する機関で 5 月中の学会参加を原則禁止する機関が 2 件あることが判明。海外からの参加者もいるプレシンポジウム講演者には参考中止を連絡）。4月 3 日：実行委員長の参考中止判断を学会執行部に打診し、迅速審査で承認された。同日、

学会会場をキャンセル。4月6日：参考中止のお知らせを大会HPに掲示。

4月21日：「第62回 日本脂質生化学会の紙上開催のお知らせと年会費納付のお願い」を学会HPに掲示。事前納付されていた参加費、懇親会費、およびランチョンセミナー経費の返金など後始末の作業も並行して実施。5月初旬：要旨集の送付（要旨集あっての紙上開催です）。7月3日：トラブル続出の返金作業完了*。9月23日：口座残高900,028円を全て学会に寄付。9月29日：銀行口座を解約し、実行委員会を解散。

*トラブル続出の返金作業：振り込み先の銀行口座を知るため個々人へメール連絡する必要があった。しかし、（1）新規加入者はすぐには会員リストに記載されず、全会員宛てメールでは届かない、（2）長年の正会員であっても会員名簿の情報が適時更新されておらずメールが届かない、（3）日本脂質生化学会に未加入で大会に参加登録された方の連絡先が分からぬ等、HPで返金方法を掲載しても、連絡がとれない方が半数近くおり、それぞれ問題を解決しながらの作業でかなり時間がかかった。また、学生の事前支払者は自身が発表者である場合が多く、そのアドレスは発表要旨登録情報から知ることができたのだが、COVID-19のせいで大学に出て来ておらず連絡がつかない場合もあった。その場合は、指導教官を介して本人に連絡をつけた。今後の学会大会運営においてはたとえ参考開催が急遽できなくなったり場合でも返金作業がなるべく生じないように工夫すべきと思われる。

一部の会員の皆様からは本来お返しすべき大会参加費を第62回日本脂質生化学会へ寄付していただきました。第62回日本脂質生化学会開催のためにご支援いただいた企業並びにクリニックの皆様方に頂戴した賛助金と共に紙上開催に係った経費に充当させていただきました。

2019年12月に中国武漢市で最初のアウトブレイクが発生したとされるCOVID-19は、2020年に入って間もなく人類史に残るような大規模のパンデミック感染症となって世界中の人々の活動全般に大きな影響を及ぼしています。その影響はこの報告書をしたためている2020年12月現在でも全く衰えておりません。しかし、有効性が期待されるワクチンがそろそろ市場に出てきそうなことから、2021年には終息とはいかないまでも混乱の収束に向けた確かな足音が

聞こえる状況になって欲しいと切に願っています。そして、香川大の上田夏生先生が実行委員長を務められる第63回日本脂質生化学会が恙なく開催されることも祈念しております。

末筆ながら、ご支援、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

[参考資料]

COVID-19 発生を受けた第 62 回日本脂質生化学会の行動計画

日本脂質生化学会員、非学会員の講演者、協賛企業等各位：

第 62 回日本脂質生化学会実行委員長

2019 年末に中国武漢市から発生し、日本国内でも感染が広がりつつある新型肺炎 COVID-19 に鑑み、2020 年 5 月 14,15 日に開催予定の第 62 回日本脂質生化学会（以下、本大会）に関する行動計画を以下のように定めましたのでお知らせいたします。

本計画は、本大会の実行委員長が日本脂質生化学会長に上申し、会長が学会執行部との相談のうえで承認されたものです。

2020 年 4 月 6 日時点以下のいずれかに当たる場合は実行委員長が判断した場合は本大会への参集を中止とする。

- ・300 人程度の中規模集会に対しても政府の集会開催中止要請が出ている場合
- ・4 月 6 日に予定されている都立高校の入学式の多くが中止された場合
- ・学会正会員の所属する大学等機関の複数が 5 月の学会出張を原則認めない判断をしている場合

本大会にて参加者を参集しない場合でも、既に発表要旨は投稿を完了しており、要旨集も作成・配布の予定であるので本大会は紙上開催されて成立したものとする。したがって本大会での発表も成立したものとし、要旨集に記載された発表者は自身の学会発表業績に使用できる（注 1）

注 1：日本薬学会第 140 回年会（2020 年 3 月 25-28 日、京都にて開催予定であった）が 2020 年 2 月 21 日に参集中止の告知を出して、同様の取り扱いをしている。この取り扱いの前例は東日本大震災により参集を中止した日本薬学会第 131 回年会（http://nenkai.pharm.or.jp/131/web/1_3_iincho.html）。

本大会への参集中止に伴う参加登録費等の取り扱い：

- 1) 参加費は各会員の銀行口座に返金し*、参加票および領収書は発行しない。なお、実行委員会予算は学会から補助される 90 万円のみで賄う。
- 2) 支払い済みの懇親会費も返金する*。
- 3) 協賛や広告は（1）に準ずる。ただし当該企業等から支払い済み相当額を学会に寄付する旨の要望があった場合は返金しないこともある。
- 4) 企業から実行委員会に支払いのあった「ランチョンセミナー開催に係る費用」及び「企業展示ブース設置に掛かる費用」に関しては返金する（当該企業から支払い済み相当額を学会に寄付する旨の要望があった場合はその限りでない）。
- 5) 本大会の準備及び事後処理のために実行委員会が支出した費用を差し引いた残預金は日本脂質生化学会に寄付する。

*これら返金のための銀行口座情報を大会事務局にお知らせいただくことになります。その際、参加費と懇親会費とでは別々の口座に返金をご希望の方は自己申告してください。

大会中に行われる予定であった幹事会、総会、データ構築委について：

- 1) 幹事会、総会は、必要に応じて適時メールベースの審議、承認を行う。64 回大会実行委員長に関しては、現執行部が選出方法を策定し、それに従って決定する。
- 2) データ構築委の開催は中止し、必要事項は隔月開催されている当該委員会の中で審議する。

プレシンポジウム（日本植物脂質科学研究会との共催シンポジウム）について：
プレシンポジウムの開催も本大会の行動計画に準ずる。よって、参考しない場合でもプレシンポジウムは成立したものとみなし、要旨集に記載された発表者は自身の学会発表業績に使用できるものとする。なお、共催シンポの参加費はもともと無料であるので参加者への返金問題は発生しない。プレシンポジウムに関するこれら計画は、日本植物脂質科学研究会側も了承している。

参考時の懇親会について：

本大会において参考型の開催をする場合でも懇親会は中止する。支払い済みの懇親会費は各会員の指定した銀行口座に返金する。

学会正会員へのお願い：2020年4月1日の段階で、所属する大学等機関が5月の国内学会出張を認めない判断をしている場合、その旨を各機関のどなたかが大会事務局（JCBL2020@nih.go.jp）にメールにてご一報いただけますと助かります。

参加予定者各位へのお願い：状況はまだ流動的であり、実行委員会は収集をするにせよ中止にするにせよ今後しばらく対応に忙殺されると予想されます。個別の問合せに関しては当分の間は対応が難しいことから、お控えいただきますようお願い申し上げます。

以上、ご理解、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

2020年3月9日

第62回日本脂質生化学会実行委員長・花田賢太郎（国立感染症研究所・細胞化学部）

脂質生化学会と植物脂質科学研究会の合同シンポジウムについて

日本脂質生化学会&日本植物脂質科学研究会
合同シンポジウム企画担当
日本植物脂質科学研究会会長
太田 啓之（東京工業大学・生命理工学院）

第 62 回脂質生化学会では、同会と日本植物脂質科学研究会の合同シンポジウムの開催について花田賢太郎実行委員長よりご提案いただき、準備と一緒に進めさせていただきました。開催目前の 4 月 3 日、花田実行委員長から脂質生化学会、ならびに合同シンポジウムの参集型開催中止の連絡を正式に受けましたが、正直なところ、今でも大変残念に思っています。

日本植物脂質科学研究会では、年に一度植物脂質シンポジウムを開催しており、今年は京都で第 33 回の開催を予定していましたが、そちらも中止となっています。本シンポジウムは、こここのところ毎年 80~100 名の参加をいただき、植物脂質科学分野の幅広い領域に関わる口頭発表、ポスター発表を実施しています。2018 年 12 月、高知大学で行われた同シンポジウム中の幹事会において、佐藤直樹前会長より合同シンポジウムの企画に関するご紹介をいただき、佐藤前会長を引き継いで花田実行委員長と合同シンポジウムの準備を進めてきました。引き継いだ当時すでに脂質生化学会の前日に同じ会場のタワーホール船堀を実施会場として押さえていただいていました。それ以後の議論で、植物脂質科学研究会側では、合同シンポジウム専用の申し込みサイトの立ち上げや、当日の受付、マイク係の配置など主に合同シンポジウムの運営に関わる部分を担当させていただくこととし、合同シンポジウムの基本コンセプト立案や講演者依頼の大部分（植物関係以外）は花田実行委員長にお世話いただく形となりました。

一方、植物脂質科学研究会の方でも、今回の合同シンポジウムの開催は改めて我々植物脂質科学分野の研究者と脂質生化学会会員の方々との大きな交流・情報交換の機会と捉えていました。そこで研究会庶務幹事 4 名（山口大松井健二、甲南大今井博之、東工大下嶋美恵、静岡大栗井光一郎）と議論を重ね、植物脂質科学分野の研究者が広く合同シンポジウムや脂質生化学会に参加いただけるよう、幾つかの仕掛けを検討しました。合同シンポジウム独自の参加申し込みサイトの立ち上げはその一つですが、それだけでなく、できる限り若手研究者を呼び

込めるよう合同シンポジウム独自にポスター発表の場を設けることを提案させていただき、そのための会場視察なども行いました。会場となっていたタワーホール船堀は、2003年に私が会場委員長として関わった1週間に及ぶ国際会議（国際原核光合成生物会議）で使用した思い出深い場所で、当時この会場を見出した時、同ホールとしても最初の国際会議の誘致の話であったと記憶しています（実際にはその後に申し込まれた学会が先に使用されたそうです）。当時の経験で会場に関する感覚が染みついていて、小規模なポスター発表であればシンポジウム会場前のホアイエで追加の会場費用がかからずに実施できると考えました。また、シンポジウムへの参加が想定される脂質生化学会非会員が脂質生化学会に連続して参加できるよう、脂質生化学会サイドでそのような参加受け入れの可否についてもご議論いただきました。ポスターパネルの使用料や、受付、マイク係のアルバイト料については植物脂質科学研究所会側で負担することを両会でお認めいただき、万全の準備を進めていたところです。中止が決まった段階では申し込みは限られていきましたが、合同シンポの締め切りを直前までの設定としていたため、結構多くの参加が見込めるのではと期待し、合同シンポ独自の懇親会も同ホールの1階を会場に準備していたところでした。

大会および合同シンポが中止となり、何よりも花田実行委員長が残念に思われていたと推察しますが、花田実行委員長にご尽力いただいた今回の機会は今後の両会の交流推進のきっかけと捉えています。植物脂質科学研究所会の方では、新たな情報交換の場を引き続き模索するよう、来年度から私の後を引き継ぐ東京大学の和田元次期会長にお願いしています。これまで研究会では、2年に一度開催される International Symposium on Plant Lipids (ISPL) や、その間の年に交互に2年に一度開催される Asian-Oceanian Symposium on Plant Lipids (ASPL) との連携を重視して会の運営を進めてきました。そのうち ISPL2020 は今年やはりコロナ禍の影響で7月に予定されていたフランスグルノーブルでの開催を見送り、各賞の授賞式のみを実施して、改めて2年後 2022 年に同地での開催(24th ISPL)を計画しています。ASPL は来年 10 月に韓国での開催(9th ASPL)となっています。今後、国内での植物脂質シンポジウムや脂質生化学会の開催の折に、今回のような企画を改めて立てることができると期待しています。脂質生化学会におかれましては、今後とも日本植物脂質科学研究所会との連携のご検討をぜひよろしくお願いします。

山本尚三先生の思い出をたどり偲ぶ

石川県社会福祉事業団理事 吉本 谷博

本学会名誉会員の山本尚三先生（徳島大学名誉教授）は、2020年4月18日に86歳で永眠されました。山本先生（以下先生と略）は、今ではアラキドン酸カスケードと呼ばれる研究の端緒から切り拓いて発展させてきました。わが国の研究者が国際的に重要な貢献をしているリン脂質由来の生理活性物質とともに、脂質メディエーターと総称されるまで研究分野が発展したことは、本学会員の皆様がよくご存知のとおりです。

先生は昭和35年に大阪大学医学部をご卒業になり、昭和36年から京都大学医学部医化学講座の早石修教授が大阪大学医学部生化学講座教授を併任することになり、その大学院生として指導を受け、のちに京都大学医化学講座へ転じました。昭和50年に野崎光洋助教授が滋賀医科大学生化学教授として転出した後に、先生が講師から助教授に昇任しました。私はこの年に広島大学医学部を卒業し、医化学講座の大学院生として先生に配属されて指導を受けるようになった。先生が脂質研究を始めたのは、1967年から米国Harvard大学のKonrad Bloch教授（1964年ノーベル医学生理学賞）の研究室に留学し、コレステロール生合成の研究に携わってからだと思います。その後留学から帰って、早石先生からプロスタグランジン（PG）の研究を開始するために、その構造を明らかにしたSune Bergstrom教授（1982年ノーベル医学生理学賞）に話をうかがうようにとストックホルムのKarolinska Institutetに派遣され、その時に対応してくれたのが当時大学院生だったBengt Samuelsson（同年ノーベル医学生理学賞）だつたと話されていました。そのようにしてPG生合成の研究を始め、小野薬品から派遣された宮本積（敬称略、以下同じ）がシクロオキシゲナーゼを世界に先駆けて精製することに成功した（1）。さらに、ステロイド研究で用いていたシリカゲル薄層クロマトグラフィーを氷点下で展開することにより、常温では不安定な未知の中間体を検出してました（2）。後にエンドペルオキシド（PGG₂/H₂）として同定され、このPGH₂から他の総てのプロスタグランジンが合成されることが明らかになった。1970年後半から80年代にかけて、プロスタサイクリン（PGI₂）、トロンボキサン（Thromboxane）、ロイコトリエン（Leukotriene）が次々と発見され、炭素数20個という意味のエイコサノイドと総称されるようになつ

た。

2018年ノーベル医学生理学賞が本庶佑京都大特別教授に授与され、オプジーボの開発に関わった小野薬品がよく報道されるが、実は小野薬品はPGに関連する薬物を世界に先駆けて研究開発してきた。そのため、京都大学医化学の先生の研究室には上記の宮本積（故人）の後任に、小野薬品から大木史郎や近藤規元がつぎつぎと派遣されてきた。先生は小野薬品の製品開発に大きな貢献をされています。当時先生の研究室では、清水孝雄（東京大学）、渡部紀久子（東亜大学）と私は、それぞれPGD合成酵素、PGF合成酵素、トロンボキサン合成酵素の研究を行っていた。1977年に英国のJohn R. Vane（1982年ノーベル医学生理学賞）が血小板のトロンボキサン合成がイミダゾールで阻害されるという論文を発表した（3）。それを読んで先生が冷凍庫から自身で窒素封入したアンプルを取りだして、私にトロンボキサン合成を阻害するかどうか実験するように言われました。中に入っていたのはアルキルイミダゾールで、コレステロール生合成を阻害する化合物であるが、副作用のため研究開発が中断されて、そのままBostonから持ち帰って長期間保管してあったという話でした。HMG-CoA還元酵素阻害薬のスタチンが開発されるずっと前から、血中コレステロール値を低下させる物質が探索されてきたと話をされたことを覚えている。先生の予想どおり、実験ではアルキルイミダゾールがトロンボキサン合成酵素を阻害することが分かった。当時はまだ大学の知的財産という考えもなく、先生はいろいろと考えた上で、小野薬品と長野のキッセイ薬品の共同開発とし、これに関する特許は両社に譲ることで契約し、私も同意書に署名した。その後、アルキル炭素数が異なるイミダゾール誘導体をスクリーニングした結果、炭素数が8個の1-オクチルイミダゾールが最も阻害活性が強いことが分かった（4）。これをシード化合物として、両社で研究開発および臨床治験が行われ、オザグレルが発売された。いまでは脳血栓症やクモ膜下出血の急性期治療の第一選択薬となり、薬理学教科書にトロンボキサン合成酵素阻害薬オザグレルと記述されるようになった。余談になるが、2017年9月小野薬品創業300周年記念式典で、iPS細胞でノーベル賞を受賞した中山伸弥（京都大）が特別講演を行い、その中で自身の博士論文で小野薬品からトロンボキサン合成酵素阻害薬として開発中の化合物（OKY-046）の提供を受けて実験したことを明らかにした。このことは先生も私も初めて知り、講演後に中山さんにこの化合物の話をしている嬉しそうな先生のお顔が印象に残っている。京都大学医化学教室には医学部の学生が放

課後に入り出し、成宮周（京都大）、岡純（国立健康栄養研）、伊藤誠二（関西医大）、福井清（徳島大）らが先生から強い影響を受けて各研究分野で活躍していることは特記すべきことである。

昭和54年に先生は徳島大学医学部生化学講座教授に就任され、冬の寒い1月4日に先生の車に最小限の実験器具と生活必需品を乗せて大阪南港からフェリーで一緒に徳島に行った。学生講義が始まる4月までの間、昼は大学の研究室の立ち上げで忙しく、ふたりとも単身赴任で公務員宿舎で共同生活をした。私は大学院を修了したばかりで、いつストレス性消化潰瘍になるか心配してくれる研究仲間がいたが、先生のやさしい人柄のお陰でならなかった。徳島大学医学部には医学科の他に栄養学科があり、その大学院生の指導も担当しており、毎年のように大学院生が入学してきた。また、研究室立ち上げの初期からアメリカ・ミシガン大学のWilliam E. M. Landsが共同研究で、カナダ・トロント Hospital For Sick ChildrenのCecil Pace-Asciakが、Sabbaticalで家族とともに徳島に半年滞在した。Pace-Asciakは、その後6ヶ月間ストックホルムの Karolinska Institutetに滞在したが、「最も寒かったのはカナダでもスエーデンでもなく、徳島だった」と数年前にトロントで再会した時に語っていた（古い家屋のすきま風）。また、上記の John R. Vane(写真)らの研究者が国内の国際学会に参加した際に、徳島大学の研究室を訪問してきた。これは、京都大学の早石教授研究室には外国からノーベル賞受賞者らが訪れてランチセミナーを行い恵まれた研究環境だったので、自分の教室員に少しでも多くの外国人研究者と接する機会を与え、貴重な経験と大きな刺激になるようにとの配慮であった。

先生の趣味はピアノで、医学部の学生を自宅に呼んで演奏会をしたり、徳島大学医学部構内の大塚講堂にグランドピアノを購入するために奔走しました。平成11年3月退官記念会でも演奏され、覚えている会員もいると思います。徳島大学から京都女子大学に移られてからは、毎年生化学会で同窓生が先生を囲んで夕食会をするのが恒例になっており、「早石先生は門下生から100人の大学教授や研究部門長を輩出した。自分は10人を目指しているので、それぞれ各自の研究に邁進するように」と門下生を叱咤激励してくれていました。門下生には、横田一成（島根大）、藤内武春（四国こどもとおとなの医療セ）、上田夏生（香川大、第63回日本脂質生化学会実行委員長）、高橋吉孝（岡山県立大）、横山知永子（神奈川工科大）、竹谷豊（徳島大）、庄野文章（徳島文理

大）、荒川俊哉（北海道医療大学）、山本登志子（岡山県立大）などがあり、先生の目標に達している。

先生は蕎麦がお好きで、教室員と一緒に京都市内や坂本のそばを食べにいきました。徳島大学へ赴任することが決まって、先生が二人で昼食をと誘ってくれたのも北白川の比叡山登山口近くの蕎麦屋でした。徳島では夏は毎日のように生協学食のざるそばを昼食にしていました。東北での学会の帰りに、わざわざ岩手盛岡のわんこそばを食べにいったこともあるほどの蕎麦通でした。私が金沢大学に移ってからも、東京の学会でお会いして午前の講演が終わると、お気に入りの神田藪蕎麦や九段一茶庵で一緒させていただきました。金沢大学医学部の特別講義で来ていただいていたが、先生は「金沢には美味しい蕎麦がない」と講義が終わって、福井の永平寺近くのけんぞう蕎麦まで車で運転していったこともある。京都大学時代からずっと先生と一緒に昼食で蕎麦以外を食べた記憶はほとんどなく、時々蕎麦を食べる時に先生のお顔を思い出すことがある。

先生は分からぬ事があると、電話帳を探して、相手にいろいろと質問をすることがよくありました。また、思いついたことがあるとすぐに電話をしていました。私が週末夕方に自宅でくつろいでいると、先生から電話があり「月曜日の朝でもいいのだが、・・・」と前置され、思いついた研究のアイデアを話されることがよくありました（休日夕方の電話は先生からと見当がついた）。最後に先生とお話ししたのは、2018年10月本庶佑特別教授ノーベル賞のテレビニュースの後で、しばらくして電話があり、京大医化学時代の思い出の話をした。この年に先生は恩師の功績を記念して創設された第2回早石修記念賞を受賞されて祝賀会が予定されていたので、「来年は山本先生と本庶先生の受賞祝賀会で嬉しい事ばかりで楽しみにしています」と電話を切ったのが最後になり、約束を果たせずとても残念に思っている。先生はだれでも面倒見がよく、研究指導ばかりでなく、個人的にも大変お世話になりました。感謝するとともに、御冥福をお祈りしたいと思います。

京都大学、徳島大学および京都女子大学で先生に薰陶を受けた研究者はたくさんおり、紙面の関係で全員を紹介できなかつたが、（ ）内に主な所属を記した。先生の詳細な研究業績については、追悼文(5-7)を参照ください。

(1) Miyamoto, T., N. Ogino, S. Yamamoto, and O. Hayaishi.
 Purification of prostaglandin endoperoxide synthase from bovine vesicular gland microsomes. *J. Biol. Chem.* **251**: 2629-2636, 1976

(2) Miyamoto, T., S. Yamamoto, and O. Hayaishi.
 Prostaglandin synthase system-resolution into oxygenase and isomerase components. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA.* **71**: 3645-3648, 1974

(3) Moncada S, Bunting S, Mullane K, Thorogood P, Vane JR, Raz A, Needleman P.
 Imidazole: a selective inhibitor of thromboxane synthetase.
Prostaglandins. 13:611-8, 1977

(4) Yoshimoto, T., S. Yamamoto, and O. Hayaishi.
 Selective inhibition of prostaglandin endoperoxide thromboxane isomerase by 1-carboxyalkylimidazoles. *Prostaglandins.* **16**: 529-540, 1978

(5) Yamamoto K, Ueda N.
 In Memoriam: Shozo Yamamoto (1933-2020). *J Lipid Res* 61:1305-1306, 2020

(6) 上田夏生, 山本尚三先生を偲ぶ. 生化学 92(3):i-ii, 2020

(7) 上田夏生, 山本尚三名誉会員のご逝去を悼む. ビタミン 94(7), 2020



(写真)前列右から 2 番目が山本尚三先生、右隣が筆者、後列左から 1 番目が上田夏生(1989/4/28 徳島)

赤松 穉先生を偲んで

国立医薬品食品衛生研究所 西島 正弘

本会名誉会員の赤松 穉先生は、2019年12月22日、86歳で逝去されました。当日、御茶ノ水駅付近で倒れられ、そのまま息を引き取られました。全くの突然のことで、悲報を伺ったときはただただ驚きました。生体膜脂質生化学分野において国内外でのリーダーのお一人としてご活躍されました赤松 穉先生がお亡くなりになったことは本会にとりまして大変残念なことです。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

赤松先生は、昭和33年に東京大学薬学部をご卒業後、大学院に進まれ、生理化学教室で修士課程を修了されました。その後すぐに国立予防衛生研究所（以下、予研）（平成9年から国立感染症研究所と名称変更；以下、感染研）の結核部に就職され、研究生活を開始されました。昭和36年に、水野伝一先生が主宰されていた東京大学薬学部微生物薬品化学教室の助手になられ、同研究室助教授であった野島庄七先生の下で生体膜脂質の研究を始められました。昭和41年から4年間、米国シカゴ大学のJ. Law教授の下に留学され、脂肪酸のメチルエステル化反応やアルキル化反応に関する生化学的研究で優れた成果を挙げられました。そのため、赤松先生はJ. Law教授による信頼が極めて高く、後日、アメリカ生化学分子生物学会の名誉会員に推薦されました。

昭和45年に帰国後、当時、野島庄七先生が部長をされていた予研化学部の室長になられ、昭和51年に野島先生の後任として化学部の部長に就任されました。平成4年には予研の組織が再編され、化学部は細胞化学部となり、同時に企画主幹という新しいポジションが設置され、赤松先生はこの要職を兼任され、平成6年3月に退官されるまで予研のリーダーとして活躍されました。予研を退官後は、明治製薬の薬品総合研究所長・常務取締役と微生物化学研究所の所長・常務理事を歴任され、創薬の分野でも指導者として活躍されました。

予研化学部室長時代の赤松先生のご研究は、大腸菌を用いての脂肪酸生合成機構に関する遺伝生化学的研究が中心でしたが、部長になられてからは高等動物培養細胞を用いたリン脂質代謝研究にシフトされました。CHO細胞からリン脂質代謝欠損株を分離し、膜リン脂質の代謝と機能に関し、数々の輝かしい成果を挙げられ、平成5年3月にこれらのご業績に対して日本薬学会賞が授与されま

した。予研は厚生省管轄下の研究所であるため、赤松先生は薬事審議会の委員など数多くの委員を歴任され、研究室の外でも幅広く活躍されました。

私は、赤松先生には予研において20数年にわたりご指導して頂きました。特に、東大薬学部の大学院生時代、抗酸菌 *Mycobacterium phlei* の膜結合性ホスホリパーゼの精製を行っており、脂質含量が極めて多い膜画分から酵素を可溶化することに苦労をしておりましたが、このような時期に、可溶化に関する新しい貴重なアイデアを何度も何度も考えて下さったことを忘れることが出来ません。赤松先生は、研究室の部員の自主性を大変尊重されました。研究費の使用についても大変に鷹揚で、お金で済むことなら何でもしてよろしいと冗談交じりに口にされていました。赤松先生の下で、思う存分、自由に研究をさせていただいたことを何事にも代えがたく有難く思っております。

赤松先生は、とても頭脳明晰で、英語は会話も書くこともとても堪能でした。予研が発行するジャーナルのある論文が中国人によって盗作されたときに、その事実を *nature* 誌に報告された時の英文は素晴らしいものでした。我々部員が書く論文も素早く的確に修正して下さいました。先生は、大変な愛妻家でもあり、ご家庭を大切にされていました。ご高齢のお父様が闘病中には、ご多忙の時でも、病院に泊まり込んで看病されていたことが印象的です。趣味として油絵を描かれたり、ゴルフを楽しまれていました。東大薬学部のゴルフ仲間による赤松杯では奥様と共に長い間お世話して頂きました。亡くなる1年半ほど前にはお元気にプレーされていたので、この度の突然のご逝去は信じられず、残念でなりません。

赤松先生に心から感謝の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。



赤松 穩先生

リピドミクスを通じた脂質研究への感謝と恩返し

かずさ DNA 研究所 生体分子解析グループ

池田 和貴

この度は、日本脂質生化学会の幹事にご推薦を頂き、心よりお礼申し上げます。微力ながら、学会の発展に尽力していく所存ですので、よろしくお願ひ申し上げます。

私は2002年に名古屋市立大学薬学部の田口良先生の下へ卒業研究生として配属され、脂質研究の門を叩くこととなりました。その僅か4カ月後に、田口先生は清水孝雄先生と立ち上げられた東京大学医学部のメタボローム寄付講座へのご栄転が決まり、私も素晴らしい環境で研究する絶好の機会を得ることができました。配属後すぐに言い渡されたお題が、先輩に付きっ切りで脂質の質量分析技術を取得しなさいということでした（これが私の苦難のリピドミクス研究人生の幕開けでもありました）。当時は、田口先生が日本で先駆的にリピドミクス研究に取り組まれており、未だ世の中に参考情報も乏しく、独自で分析技術を切り開いていくしかない状況でした。いざやり始めると、脂質分子の取り扱いの難しさや、今よりも不安定で繊細な分析装置に大苦戦の毎日で、技術取得には最低でも1年はかかると最初に言われた意味を実感することとなりました。

リピドミクスの基礎から携わって分析技術を磨いた甲斐もあって、世界で初めてガングリオシドなどの糖脂質の包括的なLC/MS分析を成功し、その後にレーザーマイクロダイセクションを組み合わせた微量局在解析の実現にも繋がりました。さらに、当時先駆けてノンターゲット解析の基礎技術開発にも取り組み、生体内で初めて酸化トリグリセリドを発見するなど、現在に繋がる重要な研究ベースを田口先生や清水先生のご指導の下で築き上げることができました。

リピドミクスの分析技術の向上にともなって、次の課題となったのは、大量の分析データをどのように効率的かつ高精度に処理するかということでした。そこで、リピドミクスでのインフォマティクス技術の導入の重要性を実感して、当時先駆的にメタボロミクスで技術導入されていた慶應義塾大学・先端生命科学研究所の曾我朋義先生の下へ特任助教として2011年に赴任することにしました。いざ中に入つて見ると、私が想像した以上にメタボロミクスのデータ処理技術は進んでおり、何とか早くリピドミクスに取り入れる必要があると感じ、構想の実現に向けて日々準備を進めておりました。

ちょうどその頃に、有田誠先生が理化学研究所でラボを主宰することになり、2014年から上級研究員として参画させて頂くことになり、絶好の実現の機会を得ることができました。一からの立ち上げで苦労することもありましたが、これまでの私のリピドミクス研究のノウハウをつぎ込んだ環境を整備でき、大きな達成感を得ることができました。当初からノンターゲット解析の技術開発や応用研究にも取り組み、今では生体中だけでなく常在菌を含めた探索範囲の飛躍的に向上したリピドミクスのシステムの構築にも繋がっております。一方で、ステロール代謝物など未だリピドミクス技術で顕在化できていない生理活性脂質も数多く存在し、得られたデータの生物学的なアノテーション技術の構築の課題も残っておりました。そこで、今度はこれらの難課題を自らで解決し、脂質代謝の全容をリピドミクスで表現したいという強い思いを抱き始めました。

幸いにも、2019年にかずさDNA研究所でラボを主宰する機会を得て、現在はこれらの課題解決に向けて取り組んでおります。また、リピドミクスとメタボロミクスを融合させて代謝全般を捉えられるような網羅的なシステムの構築を進めております。さらに、2020年から産業競争力懇談会（COCN）において、リピドミクスの推進テーマの代表を務めており、リピドミクスの標準化や他のオミクス・医療情報とのデータ統合などの課題の解決に向けての取り組みを始めております。これらの活動によって、次は私がリピドミクスを通じて脂質研究への恩返しできればと考えております。

最後になりましたが、日本脂質生化学会の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

会の活動状況

- 1 第 62 回日本脂質生化学会・研究集会の開催(誌上開催)
実行委員長 : 国立感染症研究所細胞化学部 花田 賢太郎 博士
日時 : 令和 2 年 5 月 14 日 (木)、5 月 15 日 (金)
場所 : タワーホール船堀
演題数 : 特別講演 1、シンポジウム 10、ミニシンポジウム 18 ランチョンセミナー 2、一般演題 75
- 2 令和 2 年度日本脂質生化学会・幹事会、総会の開催
令和 2 年 9 月 メール会議で開催された
 - (1) 令和 2 年度事業ならびに決算報告
令和 2 年度の事業報告ならびに決算報告がなされ承認された。
 - (2) 令和 2 年度事業計画ならびに予算案
令和 2 年度事業計画ならびに予算案の報告がなされ承認された。
 - (3) 役員・幹事の選出および名誉会員の推薦
 - ・青木 淳賢 先生 (東京大学大学院薬学系研究科) の庶務幹事就任が承認された。
 - ・令和 2 年 12 月 31 日任期終了予定の幹事の再任が承認された。
(令和 3 年 1 月 1 日～令和 6 年 12 月 31 日迄) (氏名は後述)
 - ・数名の新幹事と名誉会員の推薦があったが、承認は次回の幹事会で行うこととした。
 - (4) 令和 4 年度 (第 64 回) 学会の実行委員長の選出
実行委員長に板部 洋之 教授 (昭和大学薬学部) が承認された。
 - (5) JCBL ホームページの改訂・更新について、今後以下の会社で行うことが提案され承認された。
NPO 法人やさしいデザイン (<http://yasashiidesign.jp/>) 所属
宮嶋 健人氏 (メディアインパクト株式会社、代表取締役) 見積額: 259,200 円
- 3 令和 2 年度日本脂質生化学会・第 2 回幹事会
日時 : 令和 2 年 12 月 1 日 (火) 13:00-14:30
場所 : 順天堂大学 A 棟 10 階カンファレンスルーム
議事
 - (1) 令和 2 年度事業報告、決算案の審議がなされ、了承された。事業案は上記総会報告、決算は卷末を参照されたい。
 - (2) 令和 3 年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された。
 - 1) 令和 2 年度事業報告
会員数 540 名 (令和 2 年 11 月 25 日)
(名誉会員 26 名、正会員 454 名、学生会員 50 名、賛助会員 10 件)
新入会 23 名 (正会員 10 名、学生会員 13 名、賛助会員入会なし)
退会 31 名 (名誉会員 (逝去) 6 名、正会員 20 名、学生会員 5 名、賛助会員退会なし)

会費納入率 77.0 % (令和元年度 11 月末実績 77.2 %)
賛助会員 10 社 (32 口) (平成 30 年実績 10 社 31 口、平成 30 年実績 7 社 19 口)

2) 令和3年度事業計画

役員

会長	梅田眞郷	(令和4年12月31日迄)
庶務幹事	青木淳賢	(同上)
会計幹事	村上 誠	(同上)
会計監査	和泉孝志	(同上)

幹事

(任期 令和3年12月31日迄)

厚味巖一、池ノ内順一、伊藤俊樹、伊東 信、今井浩孝、今井博之、岡崎俊朗、岡本安雄、笠間健嗣、唐澤 健、木原章雄、櫛 泰典、坂根郁夫、菅谷純子、杉浦隆之、杉本幸彦、鈴木 聰、鈴木 淳、瀧 孝雄、中島 茂、原俊太郎、松本幸次、村上 誠、室伏きみ子、矢富 裕、山下 純、山本登志子、横田一成、横山和明

(任期 令和4年12月31日迄)

有田 誠、有田正規、石井 聰、岩渕和久、岩森正男、植田和光、上田夏生、内海英雄、榎本和生、小川 順、菊田安至、斎藤芳郎、佐々木雄彦、佐藤隆一郎、白井康仁、杉本博之、杉山英子、高桑雄一、多久和陽、田口友彦、徳村 彰、中津 史、中村元直、花田賢太郎、松田純子、三浦進司、村田幸久、室田佳恵子、山崎 晶、横溝岳彦、横山知永子

(任期 令和5年12月31日迄)

青木淳賢、和泉孝志、板倉弘重、井ノ口仁一、梅田眞郷、岡本光弘、川口昭彦、京ヶ島守、久下 理、黒瀬 等、小林哲幸、島野 仁、須貝昭彦、鈴木 隆、田中 進、田中 保、谷口直之、田村 康、中村和生、中村由和、中山玲子、平林義雄、深見希代子、本家孝一、松坂 賢、宮崎 章、森井宏幸、

(任期 令和6年12月31日迄)

新井洋由、池田和貴、板部洋之、井上裕康、加納英雄、小林俊秀、清水孝雄、瀬藤光利、高橋吉孝、供田 洋、仲川清隆、日高宏哉、松澤佑次、保田立二、山下 哲、山本 圭

名誉会員

五十嵐靖之、池澤宏郎、井上圭三、大島美恵子、鬼頭 誠、古賀洋介、斎藤国彦、鈴木明身、鈴木邦彦、脊山洋右、田口 良、武富 保、竹繩忠臣、玉井洋一、中野益男、西島正弘、野沢義則、野島庄七、林 陽、飯田静夫、牧田 章、宮澤陽夫、矢野郁也、山田晃弘、横山信治、吉本谷博、和久敬蔵

賛助会員:10社(計32口)

- (5口) 小野薬品工業(株)、塩野義製薬(株)、佐藤製薬(株)、太田油脂(株)、東ソー(株)
- (2口) 雪印メグミルク(株)、(株)ナールスコーポレーション
- (1口) 大塚製薬工場(株)、(株)ダイセル、備前化成(株)

事業

イ) 令和3年度（第63回）学会

実行委員長 : 香川大学医学部 上田 夏生 教授
日時 : 令和3年6月9日（水）、6月10日（木）
場所 : サンポートホール高松

ロ) 脂質生化学研究63巻発行

演題募集（Circular2021の発行時に）	2月初旬
演題申込および原稿締切	2月下旬
プログラム編成会議	3月中旬
入稿	4月中旬
講演集発送	5月中旬

ハ) 脂質生化学研究Circular2021の発行 1月下旬

二) 会議

日本脂質生化学研究会総会	令和3年6月9日
第1回幹事会	令和3年6月9日
脂質データベース構築委員会	令和3年6月10日
第2回幹事会	令和3年12月

（3）新幹事の選出および名誉会員の承認

新幹事の承認 池田 和貴 先生（令和2年1月1日～6年12月31日迄）
名誉会員の承認 竹縄 忠臣 先生

（4）第63回日本脂質生化学会の準備状況について、上田 夏生 先生から説明があり、ランチョンセミナーと懇親会の開催の有無やWEB開催の可能性について議論がなされた。

（5）脂質データベース構築委員会は、大会開催時に学会の公式行事として行うことが承認された。

日本脂質生化学会 令和2年度仮決算報告及び令和3年度予算（案）					
収入の部	令和2年度				令和3年度
項目	予 算	11/20現在	今後発生予定 (概算)	12/31	予 算
正会員会費	2,300,000	1,680,000	50,000	1,730,000	2,300,000
賛助会員会費	330,000	190,000	100,000	290,000	290,000
講演集売上	100,000	5,000	0	5,000	5,000
広告収入	40,000	34,500	0	40,500	40,000
寄付金	0	900,028	0	900,028	0
利子	20	17	0	17	20
雑収入	20,000	15,284	0	15,284	15,000
小計	2,790,020	2,824,829	150,000	2,980,829	2,650,020
前年度よりの繰越金	4,617,823	4,617,823		4,617,823	4,410,745
計	7,407,843	7,442,652		7,598,652	7,060,765

支出の部	令和2年度				令和3年度
項目	予 算	11/20現在	今後発生予定 (概算)	12/31	予 算
研究集会補助	900,000	900,000	0	900,000	900,000
会報製作費	210,000	211,640	0	211,640	220,000
講演集製作費	720,000	699,259	0	699,259	700,000
旅費	80,000	28,000	60,000	88,000	100,000
郵送・通信費	370,000	330,632	20,000	350,632	360,000
サーバー・ドメイン管理費	55,000	55,019	0	55,019	60,000
事務用品費	160,000	25,300	0	25,300	50,000
会合費	100,000	27,354	2,000	29,354	100,000
謝金	0	0	0	0	0
総会経費	0	0	0	0	0
事務経費	150,000	150,000	0	150,000	150,000
事務委託費	640,000	678,703	0	678,703	700,000
雑費	0	0	0	0	0
小計	3,385,000	3,105,907	82,000	3,187,907	3,340,000
次年度への繰越金	4,022,843	4,336,745		4,410,745	3,720,765
計	7,407,843	7,442,652		7,598,652	7,060,765

日本脂質生化学会 令和2年度仮決算明細			
(令和2年1月1日～令和2年11月20日)			
<収入の部>			
項目	内 容		金 額
正会員会費			1,680,000
令和2年度会費	5,000×265名	(1,325,000)	
令和2年度学生会費	3,000×25名	(75,000)	
過年度会費	5,000×46名	(230,000)	
過年度学生会費	3,000×10名	(30,000)	
次年度会費	5,000×4名	(20,000)	
次年度学生会費	3,000×0名	(0)	
賛助員会費	6社×19口分		190,000
講演集売上	5,000×1冊		5,000
広告収入	2社		34,500
国立感染症研究所（大会校）寄付金			900,028
利息			17
雑収入			15,284
著作料	医学中央雑誌	(13,640)	
	サンメディア	(1,644)	
小 計			2,824,829
前年度繰越金			4,617,823
合 計			7,442,652
<支出の部>			
項目	内 容		金 額
研究集会補助	第62回日本脂質生化学会（国立感染症研究所）		900,000
会報製作費			211,640
講演集製作費			699,259
旅費			28,000
郵送・通信費			330,632
会報、会費請求郵送料		(122,430)	
講演集発送費		(191,039)	
その他送料		(9,910)	
振込み手数料他		(7,253)	
サーバー・ドメイン費			55,019
事務用品費	封筒		25,300
会合費	プログラム委員	(27,354)	27,354
	第2回幹事会	(0)	0
事務経費			150,000
事務委託費			678,703
雑費			0
小 計			3,105,907
次年度繰越金			4,336,745
合 計			7,442,652

賛助会員

(5口)	小野薬品工業株式会社 塩野義製薬株式会社 佐藤製薬株式会社 太田油脂株式会社 東ソ一株式会社 ホロバイオ株式会社
(2口)	雪印メグミルク株式会社 株式会社ナールスコーポレーション
(1口)	株式会社大塚製薬工場 株式会社ダイセル 備前化成株式会社

(以上 11 社 37 口)

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 学生会員は、大学院または大学等に在籍し、脂質の化学的、生化学的研究に関連する分野を専攻する者で、正会員 1 名の推薦をうけて本会に登録を行い、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (4) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名 誉 会 長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べることができる。
- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする、重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員の便宜を供する。

本会の事務局は、〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル9階 (株)春恒社内におく。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月 2日改訂)

(平成23年5月12日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

日本脂質生化学会の事務局は、(株) 春恒社内に置き、以下の事務取り扱いを行なっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. Circular および要旨集の発送とその未着クレーム等の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12 新宿ラムダックスビル 9F
(株) 春恒社 学会事業部内

TEL : 03-5291-6231

FAX : 03-5291-2176

E-mail : JCBL@shunkosha.com

日本脂質生化学会の年会費は、正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 梅田 眞郷



THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Shunkosha Co., Ltd.
Lambda Building 9F
2-4-12 Ohkubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan
JCBL@shunkosha.com
Tel : +81-3-5291-6231, Fax: +81-3-5291-2176

日本脂質生化学会事務局

〒 169-0072
東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル 9F
(株)春恒社 学会事業部内
JCBL@shunkosha.com
Tel : 03-5291-6231, Fax: 03-5291-2176